

渋谷ラジオ #28「あれから、これから」

その2「創作活動のその先」 第2話：福祉とコスメ、ブラインドメイクも ※約 22 分

出演 ゲスト・原田啓之（医療法人清明会 障害福祉サービス事業所 PICFA 施設長）、茂田正和（株式会社 O S A J I 代表取締役、一般社団法人日本ケアメイク協会 副理事長）、ナビゲーター・門あすか（東京都渋谷公園通りギャラリー）

門 みなさんこんにちは。東京都渋谷公園通りギャラリーが配信する渋谷ラジオ「あれから、これから」（その2）の第2話です。ナビゲーターは、東京都渋谷公園通りギャラリーの門〔モン〕あすかです。

今回は、アートを仕事とする福祉施設 医療法人清明会 障害福祉サービス事業所 PICFA [ピクファ] 施設長の原田啓之さんにお話を伺いました。続いて、ピクファの作家が描いた作品を商品パッケージのデザインに使用したスキンケアブランド「O S A J I [オサジ]」（以降、「オサジ」と表記）の創設者でブランドディレクターでもある茂田正和さんにご参加いただき、お話を伺っていきたいと思います。

（ジングル：ottotto 「CLAP」）

門 茂田さん、初めまして。

茂田 はい、初めまして。

茂田・門 どうぞよろしくお願いいたします。

門 今日は、いくつかお尋ねしたいことがあるのですが、最初に茂田さんのことを少し教えてください。

茂田 僕自身は美容全般を仕事としているのですが、化粧品を作るという仕事もメインの仕事としてあるのですが、学生時代とかで化粧品を作ることを学んだ経験もなく、化粧品メーカーに勤めた経験もなく、本当に二十数年前に母親が肌トラブルを起こして、そのタイミングの時に、僕らの時代は就職氷河期といわれた時代で、企業に就職するのが必ずしも正とは言われていなかったというか、起業をしたりする人間もポツポツいていう時代の中で、音楽業界にもともといたのですけれども、音楽業界を辞めてから、さて自分はどうやって生きていこうみたいなタイミングだった時に、母親の肌トラブルがあって、本当にこのタイミングで、興味本位で自宅のキッチンで母親に向けて化粧品を作り始めたというのが僕の化粧品作りのスタートで、それからなんやかんやと二十数年化粧品を作ることを続けていて、化粧品を作ることのみならず美容に通じることを自分のライフワークとして今も続けているというような人間です。

門 ありがとうございます。御本も出されていますよね。

茂田 そうですね。本当に美容につながることは全てということで、『食べる美容』という本を出しています。一冊目は、わりと皮膚科学とか美容ということに完全にフォーカスした本で、二冊目は食べる美容ということで、僕自身幼少の頃から料理を作るのが好きで、料理も一つの自分の中でのライフワークみたいなところもあって、食から美容を考えようというテーマで、『食べる美容』という本を2年前に出版させていただいて。さらには美容についてもっと真髓を考えていくと、人のメンタルとか精神みたいなものが、やはり人の体のいろんな機能というものを司っていて、食べるもので皮膚ができるから当然それは大事だし、さらにその上では食べたものがどう体の中で作用していくかという意味では、精神

というものが大事というところもあって。もともと音楽業界にいた伏線回収的に聞く美容というテーマで、音楽を聞くことも美容だという、ある意味で、こじつけといえどこじつけだし、公私混同といえど公私混同だしみたいなことのイベントもやりながら、とにかく美容につながるというよりも、どう心から美しくあれるかみたいなことを、テーマにいろんなことを模索しているという感じですかね。

門 そういった点では本当にアートと共通点が多いかなと思うんですけども、より良く生きるために日々をどうしていくかということだと思えます。

オサジはどんなブランドかお聞きしてもいいですか。

茂田 オサジは、もともとルーツは、僕のルーツが、母親が皮膚トラブルを起こして、母親に向けて、当時ありとあらゆる化粧品が使えなくなった母がいて、その母に向けて化粧品を作り始めたという意味では、敏感肌用というのが一つのキーワードになってきたんですけど。僕の中では敏感肌用という概念ではあまり捉えていなくて、究極のユニバーサルな化粧品を作りたいという。敏感であろうが健康であろうが、老いも若きも男性女性が幅広く使える化粧品を作りたいという思いを常に持っていて。当時、敏感肌であると、すごく使える化粧品が絞り込まれていって、母親もパッケージがいまいちなものを使わなきゃいけないみたいなことを、それも彼女にとってはすごく大きなストレスだったということもあって。なので、ちゃんとライフスタイルに馴染むデザインであり、なおかつジェンダーとかいろんなことを広くユニバーサルに使える化粧品を作るということを僕はテーマにしているのがオサジというブランドというふうに自分の中では捉えています。

門 私にとっても化粧品ってやっぱりパッケージから気持ちが上がらないと、やはりなかなかお家に置いて毎日使うという気持ちにならないものかなと個人的には思います。

ここはラボとおっしゃっていましたが、どんなことを日頃されているところなんですか。

茂田 ここは、オサジのプロダクトの開発全てが行われているところで、スキンケアとかヘアケアというものを開発するセクションがあって、またメイクアップとフレグランスの調香をするということも含めて、規模は小さいながらに今、オサジで作られるプロダクトの開発というのはすべてここからスタートしていく場所ですね。

門 まさに、ここが拠点なわけですね。開発の拠点。お部屋はパーテーションがされていて、水場がある、すごいオシャレなキッチンみたいな実験室が奥にあり、手前にブースがあって、本当に化学実験をするような薬品の瓶のようなものがたくさん並んでいたり、見たことがない機械がたくさん並んでいます。

最近そのブラインドメイクということを知ったのですけれども、ブラインドメイクについてもお話いただいてもいいでしょうか。

茂田 ブラインドメイクは、本当に全盲の方が自分の指先の感覚だけでフルメイクできるという手法を大石華法〔かほう〕さんという方が開発されて、それが少しずつ視覚障害の方々の中に広まっていった。ケアメイク協会という協会は、ブラインドメイクを視覚障害の方に広めていく、伝えていくという協会なんですけれども。もちろん、もともと目が見えない方もそうですけれども、途中から見えなくなった方は、特に女性だと、もともとメイクをして出かけるというのが当たり前の生活の中であって、目が見えなくなったということと同時にメイクをするということも失う。メイクをしない自分、当然すっぴんで外に出るといって、女性にとっては近くのコンビニぐらいだったらいいのかもしれないけれど、大きな抵

抗がある中で、やっぱり女性にとって視覚障害になって、目が見えなくなると、メイクができなくなるということが、社会参加をすごく遠ざけてしまう要因になっていて。逆を言うと、目が見えなくなってもきちんと自分でメイクをすることができて、そうすると前向きな気持ちになって出かけるようになるとか、社会に参加するようになるとか、人と出会う機会が生まれたりとか、あるいはそこから恋が生まれて結婚したりとか、そういう素敵な物語がたくさんあって。

何よりも、この場所にブラインドメイクを開発された大石さんと、今、ケアメイク協会の理事長をやっている山岸さんの2名が、何年前でしたかね、いらっしゃって、僕の前で実際にデモンストレーションをやってくださったんですね。その時に本当にちょっと涙が出るぐらいの感動をしたんです。

それはなぜかという、大石さん自身がすごく視覚障害を持った人たちがメイクをする所作ひとつに対して、所作が美しくなければいけないとか、自分をちゃんとめでる感の中でメイクをしていくことに対してすごく強いこだわりと、ある意味で視覚障害の方々に対しても厳しく接していたというのもある。所作ひとつひとつの美しさというものに対してもすごく感動をしたし、僕自身、化粧品をずっと作り続けてきているけれど、僕自身が化粧品のヘビーユーザーでは当然なくて、僕はむしろ肌はめちゃくちゃ頑丈なタイプで、いまだに別にスキンケアしなくても平気という。人生の中で使う化粧品というカテゴリの中で言ったら、シャンプーと整髪料ぐらいしか使わない。あと香水とかを時々使うぐらい。実際はユーザーというところからかけ離れた自分自身はいて、ただ自分の中ではひたすらに誰かのためになるとか、誰かが喜んでくれるとか、そういうことをひたすらにモチベーションにして、最初は母だったし、その後は自分の子どもだったりとか、何か自分の身の回りの人が困ったりとかしていることを、自分が化粧品を作ることで解決できるという喜びを、糧にずっとやってきたんですけれども。ただ究極的に化粧品を使う人たちにとって、化粧品の価値というものは何なのかというのは、僕の中では分かれていないんじゃないのかなというのが、ずっとコンプレックスだったんですよね。その化粧品を作り続けてくる中で。

それが実際に自分の前でブラインドメイクをデモンストレーションしてもらって、やっぱりそのメイクをすることによる、ブラインドメイクなんですけど、メイクをするだけでなく、その前のスキンケアから丁寧にやるプロセスがあるんですね。きちんと自分を律して、それによってメイクができたという事実だけでなく、自分と対話をするというプロセスも経て、初めてその人は外に出るという勇気を得る。人と出会うという勇気を得るという一連を見た時に、すごく自分の中ですっと、自分がやってきたことってこういうことなんだ。自分がやってきたことの価値ってこういうものなんだというのが、すごく腹落ちできる瞬間だった。なので、すごく純粋に感動したし、自分を肯定することができた瞬間でもあって、という時間だったんですね。

なので、それがあって、当時まだブラインドメイクも駆け出し、間もない時だったので、僕は純粋に自分が感動したことを、自分とともに美容をやっている人たちにも見てもらいたいと思って、大きい会議室を借りて、ブラインドメイクのデモンストレーションをやった。やっぱりそうすると、当時メイクアップアーティストの方とか、美容ジャーナリストとか美容ライターさんとか、美容に関わる僕の周りの友だちに近い人たちが、たくさん来ていただいたんだけど。やっぱり感動して涙する人が多発するという状況も、その時目の

当たり前にして、やっぱりこれを僕が感じた感動だけではなくてというのは、すごく思ったんですね。

そういうことのインパクトがちょっとずつ重なって行って、ブラインドメイクを駆け出したばかりのブラインドメイクをケアメイク協会という協会をつくって、理事長はぜひとも当事者である山岸さんになってほしいと。それをサポートする形で副理事長になってもらえないかというのを、当時お話しいただいて、僕がお役に立てるんだっただという形で、ケアメイク協会が設立された時から副理事長という位置で、ずっと続けています。

門 原田さん、メイクって色つけるだけじゃないんですよ。

原田 もちろん、もちろん。

門 今ちょっと遠い顔してるなと思って。

原田 いやいや、実は茂田さんに誘ってもらって、学会も一緒に行ったことがあるんですよ、ブラインドメイクの。

門 失礼しました。

原田 結構、そうなんだという風に陥ることがたくさんあって。僕も意外と頑丈に見えて、すごい乾燥肌で、ぬりぬりしてないとポロポロ剥げ落ちてくるじゃないけど。自分をよく見せるというところと、自分を守るというところの部分。意外と茂田さんと話していると、美容とか化粧品と言われるものと、福祉と障害とは、みたいなことって、意外とリンクすることがすごく多くて、それは茂田さんと話していると、いつも一緒のことやってる、全然業界違うんですけど、っていうのはすごく感じます。

門 どんどこどころですか？

原田 発信するにあたって、過程を大事にするのか、結果を大事にするのかって、意外と個人差によって違うじゃないですか。ただそこに対して、価値観をちゃんとお互いが擦り合わせているかどうか、っていうのは結構大事だと思うんですよ。結果を求めにしろ、過程をいくにしろ。その価値観って何かっていうと、茂田さんのところに行けばこういう開発。本当に今僕が見える視界にラボがあって、今ラボの中に5、6人いて、開発したてのクリームみたいなのを女性が肌に塗って、匂いを嗅いだりとかしてるみたいなものっていうのは、僕たちのアトリエで言えば、彼らが新しい画材とかを自分の手に塗って、紙に塗ったりとか、その色を見てたりとかね。画材って自閉症の子たちって匂いがすごい敏感なので、その匂いをくんくん嗅いでたりとか、意外と共通する部分ってすごく多い。もう本当に細かいこと言い出したらキリがないけど、本当に似たようなことがたくさんあります。

門 福祉がこういう商品開発に関わること、稼いじゃいけないみたいなイメージがどうしてもあるじゃないですか。

原田 工賃を稼ぐってなったときに、じゃあどれぐらい稼いだらいいのかって考えたときに、いわゆる健常者の最低賃金のぐらいはまず障害者施設で稼ぎたい。なんでそう思ったかっていうと、やっぱり重度の人だと、洋服とかそういうものってお母さんが用意する。お母さんが用意するってなると、着やすいものになる。着やすいものって基本ジャージなんですよ。ボタンもない。止めるね。チャックもない。紐を結ばなくてもゴムが入っている。ベルトループもないんでベルトも通さなくていい。じゃあその状態で障害者はいいいっていうものにしてしまっていていいのかっていう。あとはどうしても障害者年金とか生活保護で生きている人も多いので、そういう洋服、ファッションとかに回すお金もない。だったらそれに回せるお金を企業さんと仕事をして工賃を得ること。いわゆる稼ぐことでやればいいっ

ていう。先ほど化粧品の話とかも出たけど、やっぱり化粧に興味ある人もいる。じゃあ百均のもので全部いいのか。それが肌に合うものなのか。そうじゃなくてオサジさんとかつながってオサジさんの化粧品を買うっていうことも別にやっていいじゃない。だったらそれで稼いでもいいんじゃないっていうので、僕の中で母親が悶々としてたところ。経済的なところもちゃんとしたい。だから稼ぐっていうところ。最初、アートを仕事にするって言って、こういうふうに仕事をやっていきますって行政に話したときに、そもそもそんなに稼げないだろうと。健常者でもアートの世界って厳しい。一握りしか稼げない中で福祉施設でできるのかっていうのと、これ衝撃的だったのが、同じ障害者、どこの施設の人とは言わないですけど、そんなに稼がしてどうするの。だって重度の人お金使えないじゃない。って言われたのが、もう俺衝撃的で、衝撃的っていうのは、ただひたすらに悲しかった。やっぱり悲しいよ。やっぱり同じ人として、ちゃんと見ていくってなったときに、やっぱり買いたいものが買える。それはあんまり高価なものを追いかけて出すとしようがないんだけど、やっぱり最低限、チャレンジして使える化粧品を買ってみるとか、お洒落してみるっていうのはしてほしい。だから工賃を稼ぐ。いわゆる経済的にも収益を上げていくっていうのは、やったっていうのはそこです。ジャージは、ピクファは基本禁止。ジャージ通勤、だって会社に、ジャージ通勤してる会社ってないじゃないですか。うちは通所施設でB型っていういわゆる仕事場なので、ジャージ上下、スポーツを仕事にしているわけでもないの、親が着せやすいようなジャージ上下での通勤は、うちは禁止です。障害者施設が、なんでそこまでこだわるんだと。着やすいものでいいんじゃないかと。本人が望んでないものを着せていくっていうのはどうなのかっていうけど、チャレンジしたこともない。一回チャレンジして、それでもこっちがいいって言えばいいんだけど、着せてそれでテンションが上がるとかね。キャラクターが入ったパンツ履いて、お洒落なやつもあるじゃないですか。それでテンションが上がるんだったら、それを本人がチョイスするっていう選択肢を僕たちが増やすっていうのは一つかなと思います。

(ジングル：ottotto 「CLAP」)

以上であれからこれからその2の第2話を終わります。引き続き第3話をお楽しみください。

第3話に続く